

令和4年度 飛騨高山SDGsパートナーシップセンター設立式 会議録（要旨）

日 時：令和4年5月16日（月） 10時00分～11時40分

場 所：高山市役所地下 市民ホール

出席者：飛騨高山SDGsパートナーシップセンター委員 12名（代理出席を含む）、
高山市SDGs推進アドバイザー 2名、オブザーバー 4名

※別紙名簿のとおり

高山市企画部長、企画課長、企画課担当監、企画課SDGs推進係長、企画課担当、
環境政策推進課長、生活環境課長、海外戦略課長

会議内容（次第）

1. 設立セレモニー

市長あいさつ（代理：西倉副市長）

委嘱状交付

センター長あいさつ（細田センター長）

委員、アドバイザー、オブザーバー紹介

2. 飛騨高山SDGsパートナーシップセンターについて

資料に基づき事務局が説明

細田センター長

- ・ 飛騨高山SDGsパートナー登録制度はいつ頃のスタートを考えているか。

清水企画課長

- ・ 本日委員の皆さまからのご意見を制度へ反映させたいので、早期に制度化に向かいたい。早ければ6月にも開始できるようすすめたい。

細田センター長

- ・ 「私なりのSDGs宣言制度」について、現状宣言数が少ない若年層への働きかけをどのように行っているか。

清水企画課長

- ・ 主に学校に対して、昨年度作成したリーフレットの配付について各学校との調整を行っているところである。またまちづくり協議会などの地域活動を通じて、地域から学校へのアプローチなどにより、SDGs宣言へと結びつけていきたいと考えている。

2. について了承

3. 事例（取組み）紹介・意見交換

SDGs未来都市計画の概要について事務局が説明

○事例（取組み）紹介

大八まちづくり協議会の取組みを山本委員が説明

細田センター長

- ・ 事例を拝見し、小学生と高齢者、それぞれ対応が違うと思うが、苦労された点などあれば教えていただきたい。

山本委員

- ・ SDGsに限らず、防災の関係などあらゆる面において、世代別に興味のある方法やわかりやすい方法が違ってくる。乳幼児の親や女性、町内の役員といった対象を分けて考えるという感覚は、以前から意識し取り組んでいる。

関SDGs推進アドバイザー

- ・ まちづくり協議会のような組織が、地域住民のSDGsの地盤を固めるという取組みについては、全国的にも稀な事例である。草の根的な取組みにより、しっかりと定着していただけるという面では、非常に良い活動と感じた。
- ・ 市内の20のまちづくり協議会が、自立していて、チェックシートやクーポンなどやれるところからやろうという正に実践型の取組みを行っていて、それぞれの取組みの積み重ねというものが、SDGsの取組みの基本を実践しているという点では、非常に好事例であると思っている。

古里SDGs推進アドバイザー

- ・ SDGsの取組み以前から、地域課題に対して取り組んでいることに感銘を受けている。こうした取組みがパートナーシップセンターを通じて、地域の皆さまにも知っていただくきっかけとなったり、他のまちづくり協議会の意識の醸成を図ることがこのセンターの役割なのかと思った。

(株) 長瀬土建の取組みを長瀬委員が説明

細田センター長

- ・ ビジネスとして社会インフラを整備しながら、SDGsや環境教育を行っていることで非常に感銘を受けた。
- ・ 社員の方のモチベーションはどうか。

長瀬委員

- ・ 社員のモチベーションはかなり高い。若手が入ってきたり、入社した社員が辞めないということが一番良いと思っている。

関SDGs推進アドバイザー

- ・ SDGsに取り組むということは、市民や企業の行動変容を促すことだと思っている。行政や公的機関が行うというイメージがあるが、本当に重要なことは市民一人一人や企業が本業として取組みを行うことである。
- ・ 地域貢献型もあるが、本業型で循環型の事業を行っていただくのがSDGsの本質であり、それを実践しているということは素晴らしいことだと思う。
- ・ 世界情勢が変わってきており、国内産業、特に林業の国内シフトに舵を切ろうとしているタイミングに来ている。そのような中で、土木と林業を一体で行う、道を作りながら木を植えていくということが重要であり、地域の経済エンジンとしての取組みを聞き、嬉しく思った。
- ・ このような取組みが他の企業へ連担していくと良いと思っており、こういう取組みを行っている企業へお金を集中的に入れていただいて、取組みを大きく広げいていただきたい。パートナーシップセンターの取組みの土台となると良いと思った。

古里SDGs推進アドバイザー

- ・ 企業経営という観点から、CSV経営 (Creating Shared Value)、儲けだけを追求するのではなく、企業や雇用者の価値を生み出すという経営の在り方を体現されていると感じている。

- ・ こういった取組みを地域の方が知って、共有することが重要である。
- ・ 他の企業へ伝染して、行動変容の前提となるメンタリティの変容ということが、時間は掛かるが、重要な一歩であると思う。
- ・ 自分たちも何かできるという一歩を踏み出すための、高山市ならではのSDGsの取組みの土台となれる取組みであると感銘を受けた。

オブザーバー（中部大学・古澤准教授）

- ・ 一之宮まちづくり協議会と、経済・社会・環境の3つの視点での取組みという話をしているが、良く話をしているのは、SDGsのホイールの丸いマークの真ん中に、まちづくり協議会の活動を当てはめてみて、バラバラにやるのではなくて、一つの活動を多角的に見ていくという視点が重要である。

オブザーバー（中部大学・櫻井教授）

- ・ 高山市の取組みに触発され、大学の中に「SDGs学際専攻プログラム」というものを始めた。
- ・ 学生がこのプログラムに沿った科目を取る、活動を行うことにより、大学が認定する資格のプログラムで、今年度は3つの学部で試用を始め、来年度は恐らく全学で実施する見込みとなっている。
- ・ 4年生のみが対象で約2,600人の学生のうち、600人程度がこのプログラムに応募している。学生は第一に、自分にとってどのようなメリットがあるかを考える。
- ・ 地域の取組みも同じで、受け手がどのようなメリットがあるか、本当に良いものであるかを示す必要があると考える。
- ・ 今の若い人たちは、現場で仕事をしながらない傾向が強いと感じており、事例にあったように、子どものうちから重機などを使った経験が、将来の職業選択の一つにしていくということが重要であると思う。

○意見交換

細田センター長

- ・ 「世界を魅了し続ける『国際観光都市 飛騨高山』の実現について」に向けて、課題などを意見交換したい。

張委員

- ・ 外国人の視点から、ほとんどの観光客は古い町並までで、それ以上は行かないのではないかと思うが、市街地以外でもたくさん魅力がある場所があり、そういったところへ行くことにより、滞在時間の延長が図れる。

- ・ 国内でも、ゴールデンルート（メジャーで人気のある観光地を回ること）がほとんどだったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、農村地域や深い体験ができる場所などが大切であると見直されている。それにより、地場産業の活性化や過疎地域の雇用促進、移住にもつながるものとする。
- ・ 旅行後のことも考え、メイド・バイ・飛騨高山認証製品のネット販売や、SNSを活用した情報発信により、つながりを持ち続けることが重要である。
- ・ 若者や女子旅などに力を入れた方が良いと考える。

高原委員

- ・ 調査を行ったことはないが、観光業界全般についてはSDGsの取組みはまだ道半ばという印象である。宿泊施設ではアメニティグッズの部屋置きからフロント置きへの転換などを行っている事業者はあるものの、飲食施設では全体的な動きとはなっていない。
- ・ 奥飛騨地域などでは、以前からの取組みとして、温泉資源を活用し、暖房に利用したり、地熱発電などの取組みを行っている。
- ・ SDGsを意識した取組みではないが、間伐材を使用した割りばしや、川掃除などの取組みは以前から行われている。
- ・ エコチェックシートなどを活用して、そのような取組みを見える化し、自分たちの活動がSDGsの17の目標のどこに関連しているかがわかるようになると、より深く日常生活でのSDGsへの繋がりを意識できると感じている。
- ・ SDGsの取組みという意識から入るとハードルが高いため、現に行っている取組みからSDGsへのつながりを考えることも、一つの方法であると思っている。
- ・ 飲食や土産物、建設業など非常に幅広い協会であることから、業界への広報などにより、SDGsへの関心について一歩前にすすめる取組みができればと考えている。

細田センター長

- ・ ここで、まとめという訳ではないが、これまでの事例や意見交換から、いくつかの課題があるため、それを少しお話しておきたいと思う。
 - ①本日の事例発表は先進事例であり、先進的な取組みについて具体的に広がりを持たせることが重要である。どのように他へ繋げていくのが課題となる。ビジネスをしながらSDGsに取り組む事例がヒントになるが、経済・社会・環境を結びつけ、SDGsの取組みを広げていく役割をSDGsパートナーシップセンターが担うものとする。
 - ②SDGsとは何かを、自分事として紐づけて取組みを考えることまでいかない人が多いのではないかと考える。そういった人々に対し、コミュニティや学校の中で、又は、世代を超えてSDGsを共有するには、どのように取り組んだら良いかが課

題である。私なりのSDGs宣言においても若年層の宣言数が少なく、いかに取り組むかをSDGsパートナーシップセンターで考えていく必要がある。

- ③高山市が持つ美しい自然環境を維持しながら、観光へ結びつけるかが課題である。小樽市の運河の保全と観光が共存できた事例では、市民と行政が議論をしながら観光などのビジネスと環境をwin-winの関係にしている。高山の場合は、生活文化と観光文化がうまく溶け込んでいる。観光客から見る非日常の景色に、子どもたちが遊んでいる日常の風景と美しい自然がカップリングされている。そういう魅力を一層高めるために、各地域の事例を取り入れながら考えていなければならぬのではないかと考えている。

古里SDGs推進アドバイザー

- ・ まずはSDGsに対する認知をしっかりと広げながら、既に取り組んでいる内容や活動を共有できるかということが最初の一步として重要である。
- ・ そのうえで、先進的な事例をしっかりと押さえながら、高山市ならではの一步を踏み出せたらと思う。
- ・ そのなかで重要なことは、市民、企業、民間の市民団体、行政など様々なステークホルダーがしっかりと連携しながら協働するということが、鍵となってくる。
- ・ 地域に生まれた隙間みたいなものを一つの主体のみで埋めることは難しいため、しっかりと情報を共有することにより、共感や当事者意識の醸成を図り、連携・協働の仕組みを作ることが重要だと思う。

関SDGs推進アドバイザー

- ・ 国のSDGs未来都市は約150の自治体が選定されているが、その中で国際的なものを目指すということを明示したのは、高山市だけかもしれない。国際化を踏まえたSDGsの取組みは日本のトップバッターとしての立ち位置であるということ、意識していただきたい。
- ・ まずは、世界を魅了し続けるためには、世界への発信をお願いしたい。そして、次に世界を見に行ってもらいたいと思っている。
- ・ 特にヨーロッパでは、エコやリサイクルなどの先進事例がある。世界の観光は、量から質へという大転換期にある。旅行者がやりたいことをさせるという観光から、ローカルルールを定め高山はこういう観光をしてもらいたいという流れになっている。自然と歴史的な町並みをどう守っていくのか皆で決めて欲しい。
- ・ これまでの便利を追求する形から、不便であっても持続できる観光を作り上げる転換期であり、国際観光都市を宣言した高山市の役割だと思っている。その素地が揃っているまちであると感じている。

細田センター長

- ・ 今回の会議で、いくつか課題が挙げられた。事務局でそれらを取りまとめていただきたい。次回の会議では、これらに対する進捗状況を聞かせていただきたいと思う。取組みの状況や新たな課題などを出していただき、地域課題の解決に向けて、どのように取り組んだら良いか、取り組んできたのか、検討してまいりたい。

今後のすすめ方について了承

4. 閉会

飛騨高山SDGsパートナーシップセンター 委員名簿

(敬称略・順不同)

団体名		氏名	備考
東海大学副学長、中部大学学事顧問		細田 衛士	センター長
高山市副市長		西倉 良介	
(一社) 飛騨高山大学連携センター センター長		六角 裕治	
経済	(一社) 飛騨・高山観光コンベンション協会 コンベンション事業部長	高原 透	
	高山商工会議所 青年部会 会長	河上 祐治	
	高山金融協会 会長	古瀬 博康	代理出席 永井 崇文
社会	高山市教育委員会 委員	白田 美樹	
	株式会社多美人生開発 取締役	張 訳丹	
	大八まちづくり協議会 事務局	山本 真紀	
環境	高山市環境審議会 委員 (環境省自然公園指導員)	小林 正直	
	株式会社長瀬土建 代表取締役	長瀬 雅彦	
	飛騨ゼロウェイストプロジェクト	佐野 愛弓	

(委嘱期間: 令和4年5月16日～令和5年3月31日まで)

SDGs推進アドバイザー

団体名	氏名	備考
株式会社ローカルファースト研究所 代表取締役	関 幸子	
慶應義塾大学大学院 特任准教授	古里 圭史	

オブザーバー

団体名	備考
中部大学	